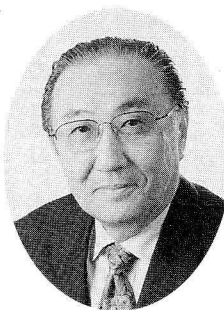


幽玄

題字
高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No.24
平成14年9月21日

五十年回顧



会長 新堀 豊彦

横浜能楽連盟は、昭和二十三年七月十一日に結成された（初代会長中村桃山）。そして五年後の同二十八年十一月二十一日から二十三日の三日間、第一回「横浜能」が、中区長者町にあった国際文化会館においてスタートをきったことは当連盟創立五十周年記念誌「お能と横浜」に詳述されている。

戦後混乱期から脱出し切っていないあの時代に、伝統芸術の大輪の花をわが横浜において開かしたことは、ハマッ子の能楽謡曲愛好者の驚くべき先見性と日本伝統文化に対する執念が感じられるのである。

しかも中村初代会長は、当代

一流の演者による即ち家元級の名人大家の出演を求め、かつ五流の揃い踏み理想とされたのであった。当時は梅若が五流の一つに数えられ、金剛は横浜ではまだ芽ぶかずの状況の中で、五流がともかく足並みを揃えて番組を組まれたことは、戦後能楽界の先駆的役割を果たしたもののといわなくてはなるまい。

まだ若かりし観世元昭師、観世鍔之丞師、近藤乾三師、高橋進師、宝生英雄師、梅若泰之（恭行）師らが、狭い仮舞台で堂々たる演技を見せられたことが想起される。既にこれらの名人は恭行師を除いてすべて冥府の人となっているが、あの不自由な環境の中でよくぞこれだけのメンバーが一堂に会しての出演がなされたかと思うと、先人の偉業にただただ頭を下げざるを得ないし、又、大きな感動にさそ

われざるを得ないものがある。この第一回から数えて、今年が第五十回。まさに半世紀、一年も休むことなく横浜能は開催され、横浜市民や能愛好者の皆さん、横浜市や神奈川県に支えられて継続されて来た。

連盟はこの能の普及に対する功を認められ、横浜文化賞（昭和四十三年）、神奈川文化賞（平成十年）を受賞するという栄誉を受けた。

そして又この横浜能楽堂建設のためにも、物心両面にわたって牽引車の役割も果たさせて頂き実現に至ったことも、振り返れば大きな喜びの思い出である。私たちは、五十回を機に「横浜能」のあり方について、思いを新たにし横浜における能の普及と発展をさらに願って、新しい時代の要請に応えたいと考えている。世阿弥以来、これ程能が栄えている時代はないとさえいわれているが、量の面より質が大切にされなければならないことが求められているのではないか。

横浜能楽堂を中心に、私たちはそうした角度の能の質的繁栄を求めて、次の半世紀に挑みたいと思っている。

平成十四年度定期総会開催

今年度の定期総会は、四月一

日現在の会員数五五九名のうち三十四名の出席（委任状によるものを含む）により、平成十四年四月十九日午後二時から横浜能楽堂二階レストランで開催された。

高岡副会長開会の辞、新堀会長挨拶、来賓祝辞（能楽堂館長代理石井利夫氏）のあと、連盟規約に基づき会長が議長となつて議事録署名人名二名（杉山淑朗、土屋政雄の両氏）の指名があり続いて各議案が審議された。

審議は、第一号議案の十三年度活動報告、決算報告、監査報告。第二号議案の十四年度活動計画（案）、予算（案）、共に原案のとおりの内容で承認された。

活動計画は主催事業のうち、第五十回記念の「横浜能」は、観世、宝生、梅若の各家元、当主により三日間行われる。これの番組には横浜能の歴史でもある第一回から第五十回までの記録を合冊したものとします。

連盟会員による「第五十回横浜能記念の集い」を本年十一月頃に開催しますので会員各位のご参加をお待ちしております。

「五流能楽大会」、五流大会のつどいは例年どおり開催します。

今回は、役員改選総会で岩田幸男、平野元弘の両氏が退任され、代って三浦重信（金春流）、阿閉貞之（観世流）の両氏が選任され、観世流藤本圭祐理事と共に

に常務理事となつたほかは全員が留任することとなりました。常務理事（総務担当）鈴木力雄

常務理事 杉山 昭二
喜多流

今年の標記大会は平成十四年六月八日 例年通り横浜能楽堂本舞台で開催されました。今年から標記大会は六月の第二土曜日に開催されることが連盟の理事会で決定されております。昨年は能一番と舞囃子五番を含め人間国宝の先生方もご出演頂くという豪華なプログラムでしたが今年は元に戻ってこれまで同様各流派の熱演をお願いすることとなりました。

幸い当日は天候に恵まれ見所に大勢の方々をお迎えして盛会裡に行うことができた出演の方々も心置きなく謡い舞われたものと存じます。

今回は喜多流と（観）海謡会が当番を担当し番組の編成から当日の運営までお手伝いを致しました。何かと行届かぬ点多かつたと思いますが連盟役員、各流派の責任者やご出演の方々のご協力により大過なく最後まで終えることができ関係の皆様から心からお礼申し上げます。

番組編成は当番幹事に一任されているとはいえ色々の配慮が

必要で苦勞する処です。今後はもう少し各流派の意向が組込まれるような工夫があってもよいような気がします。印刷に当っては各流派の迅速な校正と印刷所の協力により予定通り出来上がりました。

当日の運営については常に問題となる出演者の切戸口への集合と出演時間の超過です。出演者の集合については今回特に夫々のグループに出演時間の予定を入り口で渡し協力を願った処、殆ど問題なく進行了ました。これは今後も実施したらよいのではないかと存じます。次に出演時間の超過については部分的には若干の出入りはありませんものの全体的には殆ど予定通りで各流派のご協力に感謝致します。

各流派出演実績

演目(番)	演者	他	計	使用時間(分)	
				予	実
観世流	7		7	160	152
(観)梅若会	2		2	60	52
宝生流	2	3	5	80	77
喜多流	3		3	40	44
金剛流	1	4	5	40	50
金春流		5	3	8	47
(観)海謡会	2	1	2	5	40
下掛宝生流	1		1	10	7
合計	18	13	5	37	477
開演 9時30分 終演 5時48分(498)					

ただ一部のグループで超過したものもあり今後は申込時点で充分検討して申し込まれるようお願いする次第です。

今回は午前九時三十分開演、

午後五時四十八分終演で若干予定より超過しましたがこれは段取りに三十三分を消費したものです。今後も三十分程度の段取り時間を考慮した番組編成が望まれます。

いずれにしてもまずまずの大会を終えることができ重ねて関係の皆様にお礼を申し上げ報告いたします。

お稽古

梅若会 堀内万紗子

私には六人の孫が居ります。

此の六人の孫達が謡、仕舞を趣味に持つようにと常に主人と申してきましたが此の時代の子供は、大人よりも多忙を極めて居ります。それでも娘の方の孫の女子二人(現在は高校生と中学生)は小さい折に久良岐舞台でお仕舞を舞って居ります。

娘も息子もお能を体験してま

すので何時かの折には復活するのではの願いのなか、十二月の冬休みに入つてのある日、息子の子供女子(中学生)がお仕舞を習いたいと申しできました。どうせ二、三回で終わってしまう事でしょうが、まあ、いらつしやいと、曜日と時間が決まり、さてその時がきました。スキップ状態で玄関に現われ、しかも小学生の妹を伴って。妹も一緒

にお稽古をすることとなりました。「おとうさんは小さい時、仕舞の稽古イヤだった」と、父親の本音もしつかりと聞かされての出現でした。決まった時間に必ずきて、楽しそうにお稽古をしてゆく姿には、私は思いがけない出来事となりました。

入られてしまった。文化賞贈呈式は十一月十四日に横浜文化体育館で行われた。団体は能楽連盟だけで、他は皆個人であった。我々能楽連盟のメンバーは全員紋付袴で出席した。なかで目立ったのはフェリス女学院の院長ヘレンサンダーさんで、サンダーさんは女性で偉大な体躯であったので一きわ目立って見えた。

時は、すばやく経過してゆくなか、私なりの現在進行形の行動に拍車をかけて居ります。子供の心にも幽玄の一端を、理解できます事を願いつつ。

文化賞は飛鳥田一雄市長から一件一件渡された。飛鳥田市長は前に私の勤務していた松尾鉦業の監査役で、私は経理担当者で何時も監査を受けていたので、私の顔を見て「あれ、あんた謡やっていたの」と聞かれたのは今も忘れられない一言である。

横浜文化賞の思い出

副会長 高岡 幸彦

横浜能楽連盟は、昭和四十三年十一月十九日に横浜文化賞を受賞した。

その時の能楽連盟のメンバー

会長 庄司 晴夫(梅若)
副会長 小久保謙一(金春)
常務理事 渡辺 義雄(観世)

高岡 幸彦(観世)
山門宇兵衛(宝生)
田所 義男(宝生)

遠藤 清(喜多)
松林 好男(喜多)

の八名であった。現在では私を除き他の七名の方は全員鬼籍に

の新堀源兵衛氏より寄せられた「横浜能の思い出」という一文を原文のままのせて当時を偲びたい。

『横浜能の思い出』

二代目会長 新堀源兵衛

昭和二十八年十一月第一回の横浜能が行われたのはまだ記憶の新しい所です。

戦前の野沢屋舞台、関東震災前の伊勢山皇大神宮舞台における各流派による演能というきわめて歴史的に大きな意義をもつ横浜の能楽謡曲界の伝統を基礎として、戦後まだ復興の道程がけわしかった頃、不死鳥の如く斯道の復活に努力をしたのが中村桃山君であります。

その後、その賞状は当時としては特別の複写で市長印も朱色で原本と見わけられない様なものが作られ、庄司会長より各役員に感謝状と共に授与された。

今も大事に保管しているが、当時これを受けた人で生きているのは、私一人になってしまった事は淋しい限りである。翌四十四年の第十七回横浜能は文化賞受賞記念として大変豪華な能が演じられた。

演能は三部に分かれ、番組は末尾に示すとおりであった。

現会長のお父上で二代目会長

という混乱期に市民文化活動の一つとして「能」を取り上げ、そ

の育成に努力をおしまなかった。当時の遠藤要・社会教育課長や同・成人係長であった植村慶富氏（現・市青少年部長）らの慧眼は敬服する外ありません。県立音楽堂が出来るまで、会場探しから苦勞し、舞台の設備に至るまで裸になって協力した課員の皆さんの姿が今でも目に浮かびます。



第十七回 横浜 能 ところ 県立音楽堂

第一部

九月二十七日（土）午後一時始

番 組

能（喜多流）

シテ 栗谷新太郎

巴

シテ 宝生弥一

大鼓 安福建雄 大鼓 観世元信
小鼓 北村 治 笛 寺井啓之

後見 栗谷辰二

地謡 梅津忠宏 上野八朗

栗谷能夫 友枝昭世

第二部

九月二十七日（土）午後五時始

番 組

能（観世流梅若会）

シテ 梅若泰之

羽衣

シテ 村瀬登茂三

大鼓 佐伯 実 太鼓 宇野親一
小鼓 穂高光晴 笛 田中 一

後見 木村薫哉

地謡 赤瀬純一 角当行雄

山崎美太郎 梅若泰之

第三部

九月二十八日（日）午後一時始

番 組

能（金春流）

シテ 守屋泰利

通小町

シテ 望月義孝

大鼓 亀井忠雄 笛 一噌仙幸
小鼓 宮増純三

後見 坂井音重

地謡 坂井音重 龍馬

花筐

シテ 観世元正

大鼓 亀井忠雄 笛 一噌仙幸
小鼓 宮増純三

狂言

後見 坂井音重

地謡 坂井音重 龍馬

仕舞

松風 岡 久雄

地謡 坂井音重 龍馬

棒縛

和泉保之 三宅右近

地謡 坂井音重 龍馬

能

能（観世流）

シテ 坂井音重

天鼓

シテ 観世元正

大鼓 亀井忠雄 太鼓 小寺佐七
小鼓 宮増純三 笛 一噌仙幸

附祝言

後見 坂井音重

地謡 坂井音重 龍馬

能

能（観世流）

シテ 坂井音重

附祝言

後見 坂井音重

地謡 坂井音重 龍馬

能

能（観世流）

シテ 坂井音重

附祝言

後見 坂井音重

地謡 坂井音重 龍馬

能

能（観世流）

シテ 坂井音重

附祝言

後見 坂井音重

地謡 坂井音重 龍馬

能

能（観世流）

シテ 坂井音重

附祝言

後見 坂井音重

地謡 坂井音重 龍馬

金春流と私

常務理事 三浦 重信
金春流



転勤族の私は当時福岡に居た。今から四十年前、昭和

の或る冬の夜、街の雑踏の中で突然頭の中にかのト短調シンフォニーのテーマが鳴り脳味噌に手術を受けたように、驚き、感動で慄えた。私の受けた衝撃はまさにこれと同種のものであったと言えは著者に対して失礼であろうか。

和三十年代初め頃のことである。或るとき職場に、同僚の中学時代の恩師なる人物が現れて、これから皆さんに謡曲を教えてあげるから、土曜日の午後会社に残っていなさいと告げられた。こうして渡辺善次先生によって七八名の若手が、いきなり「羽衣」の一句づけから勉強を始めることとなった。

謡曲に五流あり、自分が習っているのが金春流であることもしばらくしてから判ったような次第である。然し先生は長らく教鞭を執られた方だけに、指導ぶりは甚だ合理的であった。「その切り方は音楽で言うスタッカートです。」等々。

やがて福岡金春会に加えていただき、例会では素謡の末席に連なることとなった。年に一、二度金春信高、桜間道雄の両師が交互にお出になり、我々初心者をお励ました。そのうちに渡辺先生は仕事の都合で東京へ移られ、代って平島長夫氏が久留米から来られた。当時の国鉄にご勤務の温厚朴訥な方であった。

毎土曜の稽古は「杜若」から「紅葉狩」へと進んでいった。その頃私はレコード屋で偶然「桜間弓川独吟集」に出会った。十インチのビクター版であった。早速入手し、一聴するや、私は大きなショックを受けた。小林孝雄はその著「モーツァルト」に記している。：若き放浪時代

の或る冬の夜、街の雑踏の中で突然頭の中にかのト短調シンフォニーのテーマが鳴り脳味噌に手術を受けたように、驚き、感動で慄えた。私の受けた衝撃はまさにこれと同種のものであったと言えは著者に対して失礼であろうか。

ところが昭和三十五年初め、私自身が神戸に転勤となったのである。ここでも何とか稽古を続けたいと思ったが、世は既に高度成長の時代に入り、寸暇の集いもままならなくなった。私の謡曲とのつながりは、僅か三年で一旦終止符を打たれた。

それから再び金春の門を尋ね、守屋泰利先生のもとで稽古を始めたのは、完全リタイアした平成九年四月、実に三十七年後のことであった。この間温存していた殆ど手擦れのない三十冊の教本は、漸く日の目を見るに至ったのである。途中長い空白があったとは言え金春流と私のかわりあいはいは、ささやか乍ら一つの歴史であったと言える。

そしてその結びは懇切なる師と親身のお仲間と共に、ひたすら謡うことを楽しむ昨今である。能「鉢木」を舞う

宝生流 古瀬 孝司

去る六月二日、水道橋宝生能楽堂において能「鉢木」を勤めさせてもらいました。

私の五十四年来の師渡邊三郎先生の「渡雲会」六十五周年記念全国大会二日目の留の能として舞わせてもらった次第です。

私が宝生流の門を叩いたのが昭和二十一年の春、会社の謡曲

グループの一員として稽古をしていましたが、職分の渡邊三郎先生に入門し、稽古を始めたのが昭和二十三年でした。転勤族として、昭和四十七年に、神奈川県に居を移したわけですが、昭和四十九年に始めて、水道橋の能楽堂で能「殺生石」を勤めて以来、竹生島、岩船、桜川、狸々と五回程能を舞っておりまして、今回の鉢木で六回となりました。



さて昨春秋渡邊先生より、六十五周年の記念大会にて、能を舞って欲しいとのおすめを頂きましたが、いささか老齢のため演能をためらいましたが、重なるおすめで、不相応にも「鉢木」を選び演能することに決心しました。昔風にいえば私も今年は傘寿を迎えるので、その記念という

意味もあり、敢えて奥伝物の能「鉢木」に取り組んでみたいと思っ

た次第です。

この能は所謂直面の能であり自らの顔を面と化して、出来るだけ表情を変化させないで舞わなければならない、その点では面をつけた能よりも、演ずるに当っては難しさがあるといえるようです。実際私にとって、直面の能ははじめての事でありましたが、舞台で舞っている時は直面であることを忘れてしまっていたようです。

前シテ上野の国の武士佐野源左衛門常世が大雪の日に旅の僧に一夜の宿を貸すが、薪にも事なく身、秘蔵せし鉢木梅桜松を切り焼べて焚いて妻と共に僧をもてなし、一族に所領を奪われ零落した身なれども、鎌倉への忠誠心は変わらないという常世の気持ち表現できるかどうか、又後シテで、鎌倉へ馳せ参じた常世が、敵入謀反人と疑われながら悪びれもせず、最明寺時頼の前へかきこまる。時頼の顔を拝すれば、いっぞやの大雪に宿を貸した旅僧その人であった。言葉に違わぬ常世の出陣姿を見て時頼の沙汰のはじめに常世を

鉢木	
シテ 近藤幸枝	フキ 宝生
ワキ 古瀬孝司	ハシラ 坂苗
間 野村万作	小唄 亀井忠雄
竹山悠樹	小唄 鶴沼連雄
後見 寶生三郎	白石邦彦
渡邊三郎	山田元就
小林与志郎	今井井良
島田 山内崇生	寺井泰良
田崎隆三	三男

(当日の番組から)

本領に復させた上、鉢木に因んで、梅桜松に縁ある三箇の荘も与えて一夜の恩に報い、常世は意気揚々として本領に帰って行くのでありますが、その後シテの気持ちの変化などが実際に出来たかどうか、本当に難しい大曲ではありました。舞終わって橋掛りを戻り先生方に迎えられた時、終わったのだなど、つくづく思いました。一時間半の舞台が勤められたのも、ご指導賜った渡邊師を始めとする諸先生方、又流友諸兄姉の励ましによるものと感謝しております。

能楽堂だより

十月・十一月の公演

横浜能楽堂では以下の通り公演を開催致します。

「第三十六回普及公演」

「ブランチ能」

十月十五日(火) 午前十時三十分。能「敦盛」(金春流) 山井綱雄、狂言「栗焼」(和泉流) 野村萬斎。正面三千七百円、脇正面三千二百円、中正面・二階二千七百円。九月十五日よりチケット発売中。

「企画公演」

「秀吉が見た(卒都婆小町)」

十一月九日(土) 午後二時。能「卒都婆小町」(観世流) 山本順之。午後六時。復元能「卒都

婆小町」(観世流) 山本順之。セツト券正面八千円、脇正面七千円、中正面・二階六千円。チケット発売中。各公演券正面五千円、脇正面四千円、中正面・二階三千五百円。チケット発売は九月二十八日(土) 窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

「第十四回特別公演」

十二月十四日(土) 午後二時。能「松山鏡」(観世流) 関根祥六、狂言「二千石」(大蔵流) 茂山千之丞。正面五千二百円、脇正面四千円、中正面・二階三千三百円。チケット発売は十一月十七日(日) 窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

《編集後記》

▽各流派のご協力をいただき、原稿は予定を超えて集まり、一部は次号に送らせていただきました。(MS記)

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合
〒233-0013 横浜港南区丸山台二丁目 二九一七 新堀方
FAX ○四五-八四四-一九〇三
◎電話の場合
横浜能楽堂 末広思帆
TEL ○四五-二六三-三〇五〇